

17.災害発生時の住民の対応、起きて初めて分かることがある

自然災害、特に地震は突然にやってきて様々な日常と異なることが起きるので、いつもと違う精神状態で行動することになります。先の東日本大震災の時の思い出してみると、大きな揺れを身体や建物で感じましたので大きな地震であることは確認できましたが、すぐ後の大きな揺れでは全く別世界でした。以下にこれまでの報告や経験、聞いたことからどんなことが起きていたのかをまとめました。

まず対応ですが、自分の体をどこに置くべきかだけが頭にあって、他人は目に入らなかったといいます。安全なところはどこかを、即時に判断することが必要だったということです。しがみつくと良いのか、机などの下に入るが良いのかの判断が即断になるということです。地震が、どのような時間帯に、どのようなところで受けるのかで大きく異なるので、次にどのようなことが起きるのかは、すぐに想定することは不可能で、ラジオやテレビで流される情報で知ることになります。しかし、知っても、どうすればよいのかに迷った人が多かったといわれていますし、外に出て様子を見る人や、海岸に出かける人も多かったといわれています。今思うと、危険極まりない行動だったと思いますが、その根底には自分は大丈夫、怖さ知らず、好奇心ということでしょう。あまり経験したことがないわけですから当然のようにも思われますが、自分は大丈夫というのは正常化の偏見（バイアス）といって多くの人を持つ心理状態だそうです。これは、異常であることを認めないまたは認めようとしめない傾向といわれ災害の程度を低く見てしまうということです。とはいえ、不安を感じて他の対応行動をとっている人が少なくないのも事実です。

そこにかかわることに情報の在り方があります。つまり、情報によって、住民がそれまで経験したことや、訓練してきた災害モードに誘導できるかどうかにかかっていると思うと、情報の在り方は修正、改善する余地があるといえます。いかに、的確に住民が行動できるように早期に、正確に、行動できるような表現も研究すべきことであると思いますし、避難の形態も変化しつつあることも伝達の対象にすべきことかもしれません。実際に有珠山の火山災害や三宅島噴火などでは、地域や島の住民全員が避難した事例もありますので参考にしたいところです。災害情報と避難に関しては、これまで避難勧告の発令とその説明内容の的確さが課題だといわれてきています。避難勧告や避難指示に関しては、その理由を明確にしなければならないということもあって、わかりやすく、行動を直接的に示す必要があります。行政の担当者や人材不足もかかわっているというのが現実ですが、今後は判断基準を明確にする努力も進行していますし、災害の状況のレベルや水位をわかりやすく伝達する方法の開発も進められています。住民や地域も災害リスクを十分把握した上で、様々な情報を判断して行動できるように備えておく必要があるわけで、時には勧告や警報が出る前に早期避難をいとわないということも必要だと思いますし、日ごろからそのようなことへの理解が進むような研修や伝達を密にすることが望ましいことになります。避難は、どうしても消極的というか、遠慮がちになりますが、その辺も日常のなかで克服しておきたいものです。